



東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター  
The Newsletter **CNEAS**

第55号

● 目次 ●

巻頭言：ノボシビルスクで日本を学ぶ学生たち	1
最近の研究会・シンポジウム	2-5
表彰式	6
展示会	6
センター客員教授紹介	7
著書紹介	7
活動風景：一 続く「白頭山」研究	8
編集後記	8



巻頭言

## ノボシビルスクで日本を学ぶ学生たち

東北アジア研究センター副センター長 岡 洋樹

東北アジア研究センターでは、2008年以來、大学間学術交流協定締結校であるロシアのノボシビルスク国立大学にある人文学部との覚え書きに基づき、同学部の東洋学科で日本語・日本文化を学ぶ学生たちを対象とした「日本アジア講座」を開催してきた。これは東北大学などで日本をテーマとしている先生方をノボシビルスクにお連れし、それぞれのご専門に関する講演を日本語で行ってもらうというものである。シベリアと日本との関係はまだ浅く、現地で日本を学ぶ学生たちにとって、日本の一級の研究者による講演を聴く機会はめったにない。彼等は優秀な学生たちであり、学部上級学年になれば、日本の大学の講義を聴いて理解できるだけの語学力を有している。本センターの高倉浩樹准教授を中心として5年間にわたって実施してきたこのプロジェクトは大成功で、現地でたいへんな好評を博している。本年のテーマは、「神話とサブカルチャーに映る現実と想像の力」というもので、大学院情報科学研究科の窪俊一准教授による「カタストロフと日本のポップカルチャー」、文学研究科の山田仁史准教授による「神話

とシャマニズム：日本・アイヌ・シベリア」の二つの講演と、恒例の現地学生による研究発表会が行われた。

大学の国際化が叫ばれる今日、日本研究は、世界的な関心を集める国際的なテーマである。ロシアのみならず、中国やアメリカ、ヨーロッパなど、日本を学ぶ学生は世界中に散らばる。日本研究の「国際語」は日本語であり、日本を学ぶ者はだれしも日本語を習得している。学生の留学熱も非常に高く、この分野は大学の国際化に直接貢献する分野なのである。東北アジア研究センターが実施してきたこのプロジェクトは、この点に着目したものである。また今年は、講座の開催に合わせて東北大学の大学説明会がノボシビルスク国立大学内で開催され、多くの学生の関心を集め、説明会場を訪れた学生の半数以上は文系の学生だった。本学発の先端的テクノロジーの発信も重要であるが、我々自身が研究対象として人々の関心を引き続けていることを再認識するべきである。本学には、日本研究の重要性を理解していただくことを切に望みたいところである。



講演の様子



東洋学科学生による研究発表

## 最近の研究会、シンポジウム等

### 国立大学附置研究所・センター長会議 第3部会(人文・社会科学系)シンポジウム

2012年12月19日、本センターが世話部局となり、ウェスティンホテル仙台において、国立大学附置研究所・センター長会議第3部会(人文・社会科学系)シンポジウムを開催いたしました。

国立大学附置研究所・センター長会議(www.shochou-kaigi.org)は全国の国立大学法人に設置された附置研究所および研究センターの所長・センター長が相互に緊密な連絡と協力をを行うことによりわが国の学術研究の振興を図ることを目的とした組織です。平成15年までは「文部科学省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議」として、国立大学附置の研究所・研究センターに加えて、大学共同利用機関なども入っていましたが、平成16年(2004年)4月の国立大学の法人化を契機に本会議とは別な組織となり、相互連携することになりました。現在、北海道の帯広畜産大学から沖縄の琉球大学まで29の国立大学で63の附置研究所、28の研究センターがこの組織に加わっており、所属の教員数は3,300名を超えています。所属研究機関の研究分野は、自然科学系、人文・社会科学系とも極めて多岐にわたり、大学を研究の場としてわが国の各研究分野をリードする多くの研究所・研究センターがこの会議の一員として活動しています。

本会議は理工学系、医学・生物学系、人文・社会科学系の3部で構成されています。今年度、本センターが第3部(人文・社会科学系)の主幹校として、毎年開催されるシンポジウムを企画しました。国立大学附置研究所・センター長会議は研究分野によって3部構成されていますが、各研究所・センターにおける研究活動はこうした分野に明確に区分されるものではありません。近年、複数の学術分野に跨る学際的研究、人文社会系と理工学あるいは医学・生物学系が連携する文理融合型研究があらゆる面で求められています。既存の研究体系に基づく教育制度を維持しなければならない学部・研究科組織と比較して附置研究所・センターはこうした新規性のある、学際的な研究を本質的に展開しやすく、文系、理系が連携した研究を標榜する組織も少なくありません。しかし同時に、こうした枠組みでの研究の困難さを指摘する声も聞かれます。本シンポジウムでは人文社会系が他分野と共同で進めている研究を紹介しながら、分野を超えた研究のありかたについて考える機会としたいと思い、各分野で文系と連携しながら活躍する研究所所属の研究者に「連携する研究所」というテーマで講演をお願いしました。

当日は14名の国立大学附置研究所・センター長を含む80名の参加者があり、東北大学伊藤理事(研究・環境安

全担当)の挨拶に続き、次の3件の講演が行われました。

- (1) 東北大学 加齢医学研究所 杉浦元亮 准教授  
非侵襲的脳活動計測で紐解く心の秘密
- (2) 京都大学 東南アジア研究所 河野泰之 教授  
地域研究における文理融合ー持続型生存基盤研究の創出
- (3) 北海道大学 低温科学研究所 白岩孝行 准教授  
環境学の構築に向けた異分野連携ー環オホーツク海地域における試みー

講演に引き続き東北大学 東北アジア研究センター 高倉浩樹准教授がコメントを行い、佐藤源之センター長(本年度第3部会長、全体会副会長)の司会で総合討論が行われました。本シンポジウムの詳細は、「東北アジア研究センター報告」として、年度内に発行の予定です。

(佐藤源之)



講演会の様子



総合討論

## 平成24年度 東北大学東北アジア研究センター 第5回学生研究交流会の開催

10月15日(月)午後、東北アジア研究センター恒例の学生研究交流会が開催された。この交流会は、東北アジア研究センター教員の研究室に学ぶさまざまな研究分野の大学院学生の相互理解と研究交流、東北アジア地域理解の涵養を目的として毎年10月に実施しているものである。東北アジア研究センターには、歴史学・言語学・文化人類学・文学・環境研究などの人文系・社会科学系、地質学・生態学・工学の理系諸分野の教員が勤務している。教員は、それぞれ大学院環境科学研究科、文学研究科、理学研究科、情報科学研究科で協力講座を開設し、教育に当たっている。学生は日常東北アジア研究センター内の各研究室で研究を行っている。文理のさまざまな分野の学生が、お互いの研究内容を紹介することによって、センターの分野間交流を活性化するとともに、専門研究と東北アジア地域理解とを架橋することを目指している。この学生研究交流会は、そのような異分野間交流を学生にインプットする場として、大きな役割を果たしている。そこでは、単に異なる分野の具体的な研究内容ばかりでなく、文系・理系のもの考え方がどのように異なるのかを知る機会ともなり、将来の学際的な研究の基盤を提供するものと考えている。

五回目の今回も昨年同様川内北キャンパス・マルチメディア棟2階大ホールで口頭発表、東北アジア研究センターさくら棟(プレハブ)2階会議室でポスター発表が行われた。口頭発表は、文系からの発表3件、理系からの発表3件、ポスター発表では文系・理系あわせて16件の発表がなされた。まず口頭発表の題目を掲げると、文系からは「明清時代の艶情小説に見える漢方秘薬について」(羅莞翎・大学院文学研究科D1 磯部研究室)、「清代内モンゴルにおけるソムについて—ハラチン三旗を事例として」

(ブレンソド・大学院環境科学研究科D1 岡研究室)、「津波被災地の復興と「アニメ聖地巡礼」に関する初歩的考察」(兼城糸絵・大学院環境科学研究科D3 瀬川研究室)の三件、理系からは「Petrology of Middle Miocene Ishikoshi Andesite in Northeast Japan and a new insight into the mechanism of the formation of platy joints」(Kei Sato・大学院理学研究科D1 石渡研究室)、「航空機搭載型および衛星搭載型合成開口レーダを用いて検知される都市域内コヒーレント散乱体の違いについて」(草野駿一・大学院環境科学研究科D3 佐藤研究室)、「干渉GB-SARによる荒砥沢地すべり地のモニタリング」(松本正芳・大学院環境科学研究科D3 佐藤研究室)というもので、いずれも地域を意識したテーマ設定になっている。ポスター発表後は、同じ会場で懇親会が開催され、学生同士の交流が行われた。

(岡 洋樹)



学生による口頭発表



ポスター・セッション

## 東北大学東北アジア研究センター・モンゴル科学アカデミー歴史研究所・中国蒙古師範大学共催 国際シンポジウム「清朝とモンゴル人」の開催

去る9月7日(金)、モンゴル国ウランバートル市中心部にあるモンゴル科学アカデミー幹部会会議室において、国際シンポジウム「清朝とモンゴル人」が開催された。東北アジア研究センターは、これまで2003年以来、モンゴル科学アカデミーとの大学間学術交流協定に基づき、モンゴル史分野でほぼ隔年、国際シンポジウムを共催してきた。今回のシンポジウムはその五回目にあたる。今回の国際シンポジウムは、科学アカデミー歴史研究所及び東北アジア研究センターが部局間学術交流協定を有する中国内蒙古師範大学旅游学院との共催で開催された。開会式では、モンゴル科学アカデミー総裁B.エンフトゥブシン博士が開会の挨拶を行ったほか、共催組織を代表してN.ヒングト・モンゴル科学アカデミー歴史研究所学者書記、岡洋樹東北大学東北アジア研究センター教授、胡日查内蒙古師範大学



共催者代表によるシンポジウム総括(左から胡日查内蒙古師範大教授、S.チョローン・モンゴル科学アカデミー歴史研究所長、岡洋樹東北大学教授)

旅游学院蒙古歴史文化研究所長・教授が挨拶した。シンポジウムでは、22名の研究者による21件の報告が行われた。内訳は日本からは4組織6名、中国から4組織6名、モンゴルから4組織10名であった。清代のモンゴル史研究は、社会主義

期のモンゴル国で多くの研究がなされてきたが、近年は中国内モンゴルの研究者による研究が進展している。また我が国でも、百年以上の研究史を有する分野であり、世界的にも、これら三国は清代モンゴル史研究の中心となっている。とくに近年は、アーカイブ史料など、モンゴルや中国に所蔵される一次史料の開放が進んだことから、新しい研究展開が見られる分野である。「清朝とモンゴル人:国家と社会」、「清朝とモンゴル人:史料と研究」の二つの部会に分かれて行われた今回のシンポジウムでも、この分野を先導する三カ国の研究者が、若手研究者を交えて、最新の研究成果を披露し、活発な議論を行った。「国家と社会」のセッションでは、やはり当該時期のモンゴル全域の様々な社会集団・身分について、公文書史料に基づくモンゴル遊牧民社会構造の研究が大きく進展していることが感じられた。また「史料と研究」のセッションでも、内モンゴル・ハラチンや帰化城トゥメド、外モンゴル・ハルハに関する公文書史料や、モンゴル文年代記に関する新知見が披露された。報告論文集は、東北アジア研究センターから刊行の予定である。



モンゴル科学アカデミー総裁B.エンフトゥブシン博士による開会挨拶

(岡 洋樹)

## 日本文化人類学会公開シンポジウム

### 「食と儀礼をめぐる地球の旅—先住民文化からみたシベリアとアメリカの旅」

2012年11月10日、日本文化人類学会公開シンポジウム『食と儀礼をめぐる地球の旅—先住民文化からみたシベリアとアメリカの旅』が本センターとの共催(オーガナイザー高倉浩樹本センター准教授、事務担当山口未花子教育研究支援者)で片平さくらホールにて以下のプログラムで開催された。

- 開会の辞/小泉潤二(大阪大学、日本文化人類学会会長)
- 趣旨説明/高倉浩樹(東北大学)
- 狩猟対象から儀礼対象へ—シベリアにおける食儀礼の起源/  
加藤博文(北海道大学)
- シベリア・トナカイ牧畜先住民における食の多様な世界/  
吉田 睦(千葉大学)
- 極北地帯の食の歴史—遺跡から見えるもの、見えないもの/  
本多俊和 [スチュアートヘンリ] (放送大学)
- アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨と捕鯨祭/  
岸上伸啓(国立民族学博物館)
- ナスカの地上絵の調査からみた食と儀礼/  
坂井正人(山形大学)
- 中央アンデス高地における日常食と儀礼食  
—農牧複合社会と牧畜専業社会の比較/  
若林大我(法政大学)
- 閉会の辞/佐藤源之(東北大学、本センターセンター長)

本シンポジウムは読売新聞社、毎日新聞社、河北新報社、日本経済新聞仙台支局、朝日新聞仙台総局の後援を受けたこともあり、一般参加者の高い関心を集め、当日の入場者数は121名であった。これだけ多くの方が集まったのは、坂井教授らによるナスカ地上絵の新発見など最新の学術成

果への関心が高かったことに加え、「食は儀礼である(食と食料に儀礼は常に伴うものである)」という本多教授の講演での言葉に端的にされているように、食という人間にとって最も身近な題材から異文化、特に宗教や世界観について思いを巡らすことができた人が多かったからではないだろうか。全体討論への参加者の質問や、ポスターセッションでの発表者との活発なやりとりからも、先住民の食と儀礼についての知的考察が、多くの参加者を「地球の旅」へと導いていたように思われる。

また、会場ではフィールドワーク写真展も実施され、発表者が調査地で撮影した写真を一般参加者が見ながら質問する形式でポスターセッションも行った。写真展では本センター客員研究支援者齊藤秀一氏、同千葉義人氏のご尽力により、フィールドの魅力写真を写真によって十分に伝えることができ、発表者来場者双方にとって大変貴重な場となった。国民の負託によって研究を行う学術機関や学会が、一般市民へ自らの研究成果をどう還元していくのかが問われる昨今であるが、本シンポジウムはそのモデルケースのひとつとなりうるものであったといえよう。(稲澤 努)



来場者の質問に答えるスチュアートヘンリ氏



会場の様子

## 第14回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

2012年10月21日(日)、東京八重洲のサピアタワー東北大学東京分室にて、第14回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会を東北アジア研究センターのプロジェクト「東アジア出版文化」研究ユニット及び共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」と共催で開催しました。今回の発表及びスケジュールは以下の通りです。

開 会 磯部 彰

研究発表 I

『鉄旗陣』と『昭代簫韶』

埼玉大学 大塚秀高

研究発表 II

「朝鮮燕行使と清朝の演劇」

京都大学 金文京

特別推進研究今後の予定について

大塚秀高教授は、宋王朝の楊家将に係わる「鉄旗陣」と「昭代簫韶」を取り上げ、征南故事と征北故事の演劇と小説との関係を明らかにしました。小説の「南北両宋志伝」や「楊家府忠勇義漢」は研究でよく取り上げられますが、演劇の

「鉄旗陣」は、日本ではほとんど研究がないテーマです。

金文京教授は、朝鮮朝の進賀使が北京や熱河で見聞した宮廷演劇について、朝鮮朝の文人に視点を置いて紹介しました。

本特別推進研究では、東アジア諸国と朝鮮宮廷演劇文化との係わり合いについても、重要な研究テーマの一つとしていきますので、朝鮮朝の状況が明らかにされることは、研究が着実に進んでいることを示すものです。

研究会には、研究分担者以外、若手研究協力者や関西や九州方面の研究者・院生も参加し、清朝宮廷演劇文化の研究文化研究の基盤形成も着実に進展を見せています。

(磯部 彰)

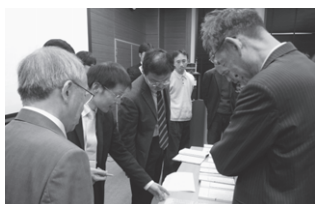


大塚秀高先生



金文京先生

## 共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」公開研究会



陳正宏先生

2012年11月11日(日)、片平キャンパスのさくらホールにて、共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」公開研究会を開催しました。

東北アジア研究センターのプロジェクト研究ユニット「東アジア出版文化」開始以来、特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」と共催の形で研究会を開いていますが、今回はメインテーマを「東アジア出版文化」研究とし、公開研究会として一般の方々の参加も仰ぎました。当日のプログラムは以下の通りです。

講師紹介

「関帝靈籤と明清社会」

特別講師 小川陽一 (東北大名譽教授)

「赤と黒～東アジア漢籍における二色刷りの世界～」  
(日本語)

陳 正宏 (復旦大学古籍整理研究所教授・東北アジア研究センター客員教授)

「安芸浅野家の漢籍蒐集と藩体制～徳川か豊臣か42万石の行方～」

磯部 彰 (東北大学東北アジア研究センター教授)

特別講師の小川陽一先生は明代小説及び日用類書、妓女文化研究など、中国社会構造から文学を研究しています。現在は、関帝信仰と占卜との関係について詳細な研究を進めています。今回の講演では、「江東靈籤」というおみくじが、三国志の関羽を祭る関帝廟と結合し、「関帝靈籤」という名のおみくじに変化し、このおみくじが多様な状況に答えられるように様々な趣向が加えられ、おまげがついて、広く明末清代社会に拡まったことを紹介されました。当日配布された詳細な資料は、目下執筆中の単行本の骨格

をなすもので、従来にはない出版文化の研究テーマであったと言えます。

本センター客員教授の陳正宏復旦大学教授は、日本の江戸時代後期では、浮世絵は多色刷印刷であった反面、書籍の印刷は単色(墨色)で行なわれていた点を取り上げ、その江戸時代に市河米菴が自己の出版物を赤と黒の二色刷で出したことを初めて紹介しました。明治になると、本文が黒で割注が赤で印刷するまでになったこと、また、ベトナムでは一枚の版木に赤と黒の墨を塗りわけて二色刷りにしたことなどを実物を展示して説明しました。その一方、朝鮮朝では両班の儒学尊重から明朝の内府(宮廷)の印刷物が墨色印刷であったことに倣って、墨色印刷しかしなかったことを、文化史の視点から明らかにしました。

私磯部は、広島藩主浅野家の蒐集した浅野文庫本について、その伝存本の特徴から、浅野文庫本は浅野本家の藩主家の蔵書で、江戸中期の藩校蔵書とは区別されていたこと、その蒐集は、桃山時代から江戸時代に和歌山を領国とした浅野幸長か、その弟の広島初代藩主長晟によってなされた可能性を指摘しました。しかも、その蒐集は単なる好学ではなく、豊臣家から徳川家へ主君を更える浅野家が君臣関係を見直す際の参考文献とした背景があったものではないかと紹介しました。同じことは、仙台の伊達家や加賀の前田家でも言えそうです。桃山時代、日本では日・朝・明の書物交流が活発に行なわれる中、朱子学などは朝鮮本を尊重して利用し学習していたことも紹介しました。

公開研究会には、河北新報で紹介していただいたこともあり、院生や学内外の研究者の他、一般市民の方も参加し、熱心な質問もいただきました。日曜日にもかかわらず参加者も予想よりは多く、さくらホールの席がほどよく埋まりました。

(磯部 彰)

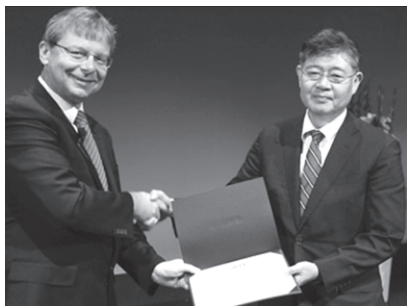


小川陽一先生

\* \* \* \* 表彰式 \* \* \* \*

佐藤源之教授 2012 IEEE GRSS (Education Award) を受賞

本センター佐藤源之教授は2012年7月23日、ドイツ・ミュンヘンで開催された国際会議IGARSS2012において、IEEE (米国電気電子学会) GRSS (地球科学リモートセンシング部会) より2012年度教育賞 (Education Award) を受賞しました。



IEEE GRSS Benedikson会長から教育賞を授与される佐藤教授

本賞はリモートセンシング研究に関して、教育、研究者育成について際立って優れた功績をあげた会員に授与されるものです。今年の該当者

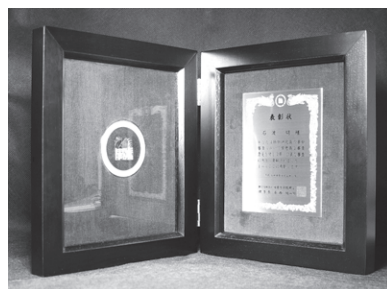
は1名であり、佐藤教授は地中レーダ、マイクロ波リモートセンシングの分野において中国、ロシアなど外国での活動を含む大学院教育、集中講義などを精力的に行い研究者養成に貢献してきたことが認められました。佐藤教授は、IEEE GRSSが毎年1回開催する国際シンポジウムであるIGARSSを2012年に仙台で開催する誘致活動を行い、大会委員長として準備を行ってきましたが、東日本大震災の影響で開催地をカナダ・バンクーバーに移して実行した経緯もあります。佐藤教授は東北アジアの環境計測に関わる研究をIEEE GRSSでの学会、研究活動を通じて推進しています。

<http://www.grss-ieee.org/about/awards/grs-s-education-award/>  
<http://www.grss-ieee.org/about/awards/>

石渡 明教授 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員 (書面担当) 表彰

今年7月末まで2年間務めていた日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員の任期が終了する際に、学術振興会が書面審査結果の公平性・公正性についての検証を実施し、その結果、私が「有意義な審査意見を付した」として表彰されることになった。今回表彰されるのは全国で20人(審査員全体の約3%)程度とのことである。表彰状と記念品は8月22日に本学の他の3人の受賞者(理学研究科2人、多元研1人)とともに片平の大学本部で本学の伊藤貞嘉理事から受け取った。自分の専門分野からかなり離れた何10件もの応募書類に目を通し、それぞれに適切な評語をつけて誤りなく評価するのは、神業に近い難行であり、私自身としてはとても表彰に値するような審査ができた自信はないが、何日か徹夜に近い状態でそのように努力したことは事実なので、有難く表彰を受けることにした。いただいた記念品は、表彰状と学術振興会のロゴが入った折りたたみ式の立派な額である(写真)。このような審査で他人の評

価をするということは、その人の将来を左右するわけで、非常に気が重い仕事である。自分自身、入試で落ちたり、科研費が通らなかつたりした時の悔しさや空しさを思い返すと、罪深いことをしていると感じる。しかし、自分の人生を振り返ると、「落ちてよかった」と思われる場合もあるので、どうか今回いい結果にならなかつた人も、気を落とさず前向きに生きて行ってほしいと願っている。なお、次の本学HPに受賞式の記事と写真が掲載されている。



<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/2012/08/award20120827-01.html> (石渡 明)

\* 展示会「ファーストネイションズ カナダ先住民の暮らしとクラフト」開催の報告 \*



2012年10月12日から11月5日の日程で東京、自由が丘のIDEE SHOP JUYUGAOKAにて、センター教育研究支援者山口未花子の監修、出展した展示会『First Nation(s) - カナダ先住民の暮らしとクラフト展』が開催された。展示会では、山口の調査地であるカナダ・ユーコン準州の先住民の伝統工芸品やその素材である毛皮、骨、現

代的な美術作品等が解説文とともに展示・販売された。また、会期のなかで連続講座「ユーコンの暮らし～現代の狩りからクラフトまで～」として、講座「ユーコンの暮らし～現代の狩猟採集ライフ～」(10月14日)およびワークショップ「ユーコンスタイルのビーズクラフトを作ろう」(11月3日)も併せて開催され、山口が講師を務めた。企画展、講座ともに盛況であり、研究成果が一般市民にひろく受け入れられる機会となった。また、ほぼ毎日刊イイトイ新聞(webサイト<http://www.1101.com>)、カーサブルータス(フリーペーパー <http://magazineworld.jp/casabrutus/dailycasa/>)といったメディアにも取材・掲載された他、カナダ大使館より参事官(商務)が視察に訪れるなど、高い関心を集めた。(山口未花子)

## ◆ センター客員教授紹介 ◆

### 陳正宏 (CHEN ZHENGHONG) 教授

2012年10月1日より、本センターの客員教授として復旦大学古籍整理研究所の陳正宏教授が来仙しました。

陳先生は、1962年中国浙江省杭州市のご出身です。1985年に復旦大学中文系を卒業し、1988年より復旦大学古籍整理研究所にて教鞭を執り、1998年復旦大より博士号を取得し、2000年に教授に昇任しました。2006年中国教育部“新世紀優秀人才支持計画”に選出され、2007年より中国国家古籍保護工作專家委員會委員を務めています。

主な研究分野は、版本目録学、文学文献学、美術文献および美術史の教育と研究。著書『沈周年譜』（復旦大学出版社、1993）は中国全国高等院校（大学）出版社優秀學術著作獎（1995）を受賞しました。著書には他に、『越南漢文燕行文献集成（越南所蔵編）』（復旦大学出版社、2010）などがあります。

客員教授在任中の主な計画として、18～19世紀、中国及び日本・ベトナムで刊行された2色、もしくはそれ以上の多色刷の版本を研究対象として、東アジアの宮廷や民間で行なわれた多色印刷による出版について分析し、出版史



上、特定の色彩や記号などの持つ役割を国情を加味して考察しています。着任後、東北大学附属図書館の漢籍及び和書を調査分析をし、中国の印刷及び套印技術の進展、及び日本での印刷史上における多色印刷と版画芸術の進展について検証する中で、市河米菴が刊行した多色刷の版本を見だし、日本漢学史に新たな視点を提供しています。11月11日の共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」公開研究会では、「赤と黒～東アジア典籍における二色刷の世界～」を日本語で講演していただきました。

(磯部 彰)

## 📖 著書紹介 📖

### センター関連出版物

#### ○学術図書

・高橋正樹・石渡 明著「火成作用」（フィールドジオロジ第8巻）共立出版（日本地質学会編）

本書は、野外で実際に地質調査を始める学生のための入門書であり、調査の参考になる基礎知識や実例などを解説した9巻シリーズの1つで、主に深成岩を扱っている。高橋が第2章（花崗岩類）、石渡が第3章（斑れい岩・かんらん岩類）を執筆し、第1章（序論）は共同で執筆した。本書は初学者の理解を助ける多くの実例を図入りで詳しく解説するだけでなく、興味深い話題や最新の研究成果も交えてより深い研究に進む糸口を提供している。第3章では、マントル上昇流の温度の違いが様々な深成岩体を生み出すこと、深成岩体の性質は地球史を通じて系統的に変化してきたことを強調した。日本地質学会Newsに宮下純夫氏による本書の書評が掲載されている（15巻10号7-8ページ）。

(石渡 明)

#### ○東北アジア研究センター報告5号

・高倉浩樹・滝澤克彦・政岡伸洋編『東日本大震災で被災した宮城県沿岸部における民俗文化財調査（2011年度報告集）』

この報告集は、宮城県地域文化遺産復興プロジェクト（事務局：宮城県文化財保護課）から東北大学東北アジア研究センターが委託調査された「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」の2011年度報告集である。宮城県沿岸部津波被災地20地区について原則二人の調査者が入り、例えば神楽保存会のメンバーなど、民俗文化財の継承・維持・発展に関わっている関係者から聞き取りを行った。その内容は震災以前の祭りなどの状況・震災時の状況、そして震災後の進捗状況についてである。津波被災地の民俗文化財の実態について延べ人数にして133人、A4で300頁に及ぶ貴重な資料と証言集となっている。

(高倉浩樹)



## — 続く「白頭山」研究

東北アジア研究センター 助教 宮本 毅

文理融合を目指し2000年にスタートした白頭山を対象としたセンター共同研究は、2010年末に2冊目の研究叢書を出版し、終了した。叢書41号の内容からも分かるように多くの自然科学的な知見を得られたが、当初の目論見であった噴火（自然災害）が歴史に対して与えた影響（渤海国の滅亡と白頭山10世紀巨大噴火との因果関係）を検討する文理融合という点では結果が得られたとは言い難い。その原因の一つとして、歴史との接点を探るために最も重要となる噴火の絶対年代を決められなかったことが大きい。噴火年代を決めるうえでそれを記述した古文書の発見が最も有力な手段であるが、国内外における文献調査からも10世紀巨大噴火を示すものを見いだすことはできなかった。自然科学的な手法による年代測定では、歴史との関わりを論ずるような一年単位での年代決定は分析の誤差などにより難しいが、近年では樹木の年輪や湖底に堆積した年縞堆積物など、一年単位で形成される試料を用いることで年単位での年代決定が試みられている。樹幹試料を用いた<sup>14</sup>Cウィグルマッチングによる年代測定もその一つであるが、正確な年代推定には測定試料が重要となる。例えば火山の裾野を歩くと、立木のままで枯死した木や谷にたまった倒木をよく目にするが、これらが噴火に巻き込まれ、それを年代測定試料とした場合には、得られる年代値が噴火の年代を示す訳ではなく、測定試料の事象（噴火）との同時性が重要な要素となる。共同研究ではこのような点を勘案しつつ、10世紀噴火の噴出物によって倒されたと確実に判断された樹幹を採取し、<sup>14</sup>Cウィグルマッチングにて年代測定を行った。ここで用いた試料は事象との同時性、年輪数などの条件では申し分ない試料であり、得られる年代値が10世紀噴火の年代を示すと期待したのだが、従来から報告されている年代よりも新しい西暦950年代の結果が得られた。東北北部では白頭山噴火による火山灰の

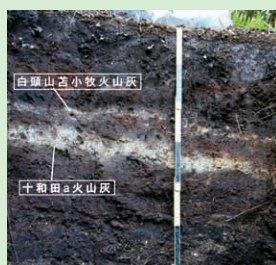


写真1 八甲田湿原における十和田a火山灰（下）と白頭山a小牧火山灰（上）

下位に、西暦915年とされる十和田火山起源の火山灰（過去2000年間で日本最大とされる噴火）が存在し、両火山灰間には時間間隙を示す土壤が挟まれる。青森県の小川原湖など東北の湖沼において採取された湖底コア中の両火山灰間に挟まれる年縞数からは十和田噴火の14-22年後に白頭山の降灰があったと判断されており、これとは明らかに

かけ離れた結果であった。ベストと考えられる試料からも明瞭な結果を得ることができず、次のステップへと通ずるための年代決定がなされぬまま、共同研究は終了した。

その後も測定年代と年縞からの年代との矛盾を解決するために研究を進めてきたが、ひとつ大きく考えの転換をはかることを試みた。白頭山試料から得た年代結果は妥当で、これまで知られてきた十和田火山の噴火年代を再考してみることである。つまり、年縞年代の起点が930年であれば矛盾はなくなるということである。そこで十和田火山の噴火年代について調べてみると意外なことが判明した。この噴火年代は1980年代に地質学者が『扶桑略紀』中の『出羽国言上雨灰高二寸諸郷農桑枯損之由』という西暦915年の記述に対しその可能性を指摘したことに端を発するものであった。その後、歴史学や考古学の方面からも検討はなされたが、噴火を示唆するこれ以上の資料はなく、どちらかといえばこの年代で矛盾はないことで支持されてきた。また、<sup>14</sup>Cウィグルマッチングなどによる詳細な年代測定結果は公表されておらず（噴火前に伐採された材木の年輪年代は報告されているが）、自然科学的な裏付けも十分とは言えない。そのため手始めとして十和田噴火で埋没した樹幹を4試料採取し、うち2試料について<sup>14</sup>Cウィグルマッチングによる年代測定を試みた。試料の枯死年代の同時性をみるために4試料の年輪パターンのマッチングを行ったが、採取試料が広葉樹であったためかよい同期は得られなかった。また、年代測定についても樹幹が細く、十分な年輪数を得ることができなかったため、残念ながら（ラフな結果としては920年前後の可能性も得られたが）年代決定には至っていない。最近、考古学の研究者に西暦915年に対して疑いはないかと質問をぶつけたが、あまり色よい反応は得られなかった。しかし、同時に十和田噴火が西暦915年であるという確証についても得ることはできなかったことから、今後も挑戦していく価値はあると考えている。仮に仮説が誤りだとしても十和田噴火の年代に対して正確な物証を示すこともできるかもしれない。今後も年代測定を軸にこの仮説の検証を進めていくつもりではあるが、今後、適当な測定試料を手にするかもある意味運が必要である。ここ2年間で数回十和田へは足を運んでいるものの、適当な試料を手にするのは難しいようである。



写真2 十和田噴火の<sup>14</sup>Cウィグルマッチングに使用した2つの樹幹試料

### 編集後記

東北アジア研究センターが入る川北地区の合同研究棟の本格的な改修工事のため、書籍、機器などすべての物品を運び出すべく夏休みから段ボールに荷物を整理する作業を徐々に進めていきました。10月半ばに各保管場所への荷物の搬出も終了し、最後に残った事務室もさくら棟に移転して、工事の早い完了を期待しながら、各人が新たな場所で研究・教育生活を始めたところです。今号も、このような環境の中で着実に歩み続けるセンターの現況をお知らせするものです。（寺山 恭輔）

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第55号 2012年12月27日発行  
発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター  
PHONE 022-795-6009 FAX 022-795-6010  
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>